

Jean Bellemin-Noël :
Vers l'inconscient du texte

久 米 博

文学作品の精神分析、と聞いただけで拒否反応を示すむきもいるであろう。正直いって私も書店で最初に本書を手にとって見たとき、例によって例のごときのものであろうとの先入観から、ばらばらページをめくってみただけだったのである。無論、この種の研究にも見るべき成果はある。しかしフロイディズムが常識化するにつれて、対象にかまわず機械的に方法を適用して、それこそ判で押したような結論をひきだしてくる研究は大方の興味をひかなくなっている。だが数日後に私の足を再び書店に赴かせて本書を求めさせ、そしてみずからの不明を愧じる、という結果に導いたのは、偶々読んだごく短い書評であった(《Le monde de l'éducation》1979年8月号)。その書評は次のことばで結ばれている。

「もしも今年は1冊の本しか読むべからずと言われたら、本書以外にない。」

著者は《Paul Valéry devant la critique de notre temps》(1971)ほか数冊の著書を発表しているが、ク・セ・ジュ文庫の《Psychanalyse et littérature》(1978)は重要である。本書に収録されている5つの論文は、はじめバリ第Ⅷ大学で講義され、後に Critique 誌, Poétique 誌などに、1970—77年に発表されたものである。先の書評子も《難解》と評しているように、この5つの論文はいずれも歯ごたえ十分で、走り読みを許さない。その《難解さ》は、表現の晦渋さにのみよるのでなく、著者が模索しつつ進めていく思考の密度の濃さに由来するところが大きい。この著者にとって、文学作品を精神分析することは、既成の方法を応用することではなく、まずその方法論から出発しなければならないのである。著者はその方法論を、対象に即して、厳密に、慎重に考究しようとする。本書はそうした5つの方法論探究の集りと言えよう。

精神分析的文学批評として、現代フランスでは、シャルル・モーロンの《psychocritique》が挙げられる。それは作品に表われた作者固有の文学形象や、個人的神話の分析を通して、作家や詩人の無意識を探ろうとするもので、モーロンはこれまでにこの方法により、ラシーヌ、ボードレール、マラルメなどに関する著作を10冊近く発表している。本書の著者ベルマン＝ノエルはモーロンのこの方法に対して、自分の方法を《textanalyse》と名づけて、その特色をうち出そうとする。すなわちその特色は、作者はカッコに入れて、テキストにおいて働いている《無意識》を探り出そうとするものである。精神分析とは、ベルマン＝ノエルの定義によれば、「無意識の欲望が表現されるメカニズムを探究する手段」である。とすると文学のテキストにおい

て、とりわけフィクションにおいて、その無意識はどのように表現されているか。それは作者の無意識と同一なのか。この問題に対して著者はこう答える。私の身体は私のものだが、私の子は私に由来するだけであるように、私の書いたものは、私自身ではない。テキストは作者よりも、それ自体を語るものである。したがって作者をその欲望によって分析することは、あたかも患者の母親を精神分析するようなものである。そこで《textanalyse》本来の問題は、「テキストの無意識的言述とは何か」である。テキストにおいて働いている無意識は、作者の書くことと、読者の読むこととの出会い点で捉えられる。それを著者は、「半分啞の彼と半分聾の私との対話」と表現する。

著者がみずから提起した問いに与える答えは、単一ではなく、とりあげるテキストに応じてさまざまである、と言うことができよう。分析はテキストの内容や形式にしたがって精妙になされねばならないことを、著者はそのtextanalyse 実践において何よりも示そうとしているようである。

本書で分析の対象とされるテキストを収録順に記すなら、ジュール・ヴェルヌの晩年の作品『ラトン家』と『嬰二氏と姪嬢』、マルセル・ブルーストの『スワンの恋』、テオフィル・ゴーチエの幻想小説『オニューフリウス』、ポール・ヴェルレーヌの詩『忘れられたアリエッタ』、メリメの3つの小説『イールのヴィナス』『ロキ』『青い部屋』である。

フロイトの概念を用いて分析する以上、分析の結果が「父親像」と「母親像」の葛藤といったものに還元されてしまうのはやむをえないが、それでも著者の分析はそれぞれの作品を新たな相のもとに見させてくれ、説得力をもつ。なかでもメリメの作品分析は、もっとも面白く、また読みやすい。

ここでは「スワンの夢を《精神分析する?》」

という論文をとりあげてみよう。私にはこの論文がもっとも重要な問題を提起していると思われたからである。ここで著者が対象としているのは、ブルーストの『失われた時を求めて』の第1篇『スワン家の方へ』第2部『スワンの恋』の最後に出てくる、スワンのみた夢の個所である (Pléiade. I, p. 378-380)。著者がこの夢をとりあげるのは、それが *onirique* な真正の夢として記述され、その文体も前後の文体とは明らかに区別されるからである。実際の夢の記録でなく、フィクションの夢を描写することは、複雑な操作を要する。何よりも夢の本質についての正確な認識なしにはできないことである。スワンのみた夢の中には白昼の生活の《現実的》要素 (ヴェルデュラン家に集まる一族、オデットの容貌、彼女とフォルシュヴィルとの情事) と、夜の《非現実的》要素 (ヴェルデュラン夫人の鼻が長くのび、口ひげをたくわえている、夢をみているスワンが話者として、またトルコ帽をかぶった青年として登場する、フォルシュヴィルがナポレオン三世に似ている、など) とが混合している。また短文を並列させる特殊な構文から成り、時間は奇妙に圧縮されていること、スワンが寝間着をきている、など突飛な状況が示され、農夫がシャルリュスの名を口にしたり、恋人たちが火事を起こしたりする。このように真正な夢とみなされる特質をそなえた夢記述が、『スワンの恋』の末尾に位置していることは重要である。その夢はスワンのオデットに対する恋をもう一度よみがえらせ、夢からさめると、彼女に対する嫉妬が消えてしまったことを、あらためてスワンに悟らせる。夢を経由して、オデットに裏切られていた残酷な現実をスワンに受け入れさせる。つまり夢はスワンの意識をこえて、深層にひそんでいたものを啓示する。夢はここで、意識とは別の場所を指示するものとして与えられている。「要するにスワンの夢は、

無意識と名づけるほかはない、ある力、ある形態の活動を含意している。」

このテキストを解釈するのに最大の問題は、ここで示される「無意識」は誰のものか、である。それはスワンのか、話者のか、ブルーストのか。著者は、このテキストでこの3者を区別し、分離するすべはなく、したがってテキストそのものを分析するしかないとする。精神分析者が患者を分析する場合と異なり、この夢テキストは2つの段階の読み方をする必要がある。第1は《註釈》的読解で、フロイト以前のアプローチの仕方である。第2はフロイト以後の《解釈》的読解である。第1は夢の《ロマネスクな解釈》であり、前後の文脈との関係において夢を解釈することである。その結果として著者は、この夢に先立つ30ページ(I, p. 353—)の間に、その《小説的解釈》に不可欠の要素が、前意識として集められていることを指摘する。つまりブルーストのテキストは夢の象徴的なメッセージと同時に、その解読格子をも含んでいるのである。この文脈的解釈はさらに、ブルーストにおいて、フロイト以前に、夢とエロスとの関係を暗示しているのである。ブルーストの深い夢理論はそれを裏書きしており、彼は夢の中で性の果たす基本的な役割を予感していたのである。

第2のフロイト的解釈が、この論文の中心である。著者はスワンの夢を解釈するのに、話者の幼時の体験（就寝前に母の接吻を受けられぬ苦悩）にまで遡って分析する。つまりテキストの無意識を構成するものとして、スワン、話者、ブルーストの3者は分離しえないのである。そのことはひいて『失われた時を求めて』全体の解釈にも関連していよう。

最後に、この論文の結びで著者が指摘している問題に注目しよう。著者がここで強調するのは、いかなる夢もテキストである、ということである。実際にみる夢も、夢語りによ

って捉えられるのであり、夢は潜在的にもテキスト性をおびている。またスワンの夢のように、フィクションとしての夢も、真正の夢として分析され得る。つまり無意識はテキストにおいて表われるのであり、逆にいかなるテキストも無意識の働きと同調した働きをもつ。テキストとして見るとき、夢のテキストも他のテキストも区別されない。「テキスト全体が夢である。」

「夢というテキスト」も、「テキストとしての夢」も、テキスト性という共通点をもっている。とすると精神分析者の作業と小説家の作業とは類比される。無意識の欲望の表現も、一種の言語表現となるからである。フロイトは『夢判断』において、無意識の夢思想というものはけっして直接的表現をとらず、「夢の作業」によって変形されて表現されるとした。その夢の作業の中で特に重要なのは、「圧縮」と「転移」である。ところでロマン・ヤコブソンはこの「圧縮」を修辞学における「隠喩」に、「転移」を「換喩」に類比したのであった。ベルマン・ノエルも精神分析と修辞学とのこの連関を強調する。そして彼の *textanalyse* は、夢言語を文字言語に転写する可能性をこれからいっそうひろげるものとして期待されるのである。ただし著者は、その場合の修辞学とは、言語の科学でなく、ディスクール科学でなければならず、そのようにして一般化された修辞学とは、ヴァレリーの言う広義の「詩学」に近いものである。

Jean Bellemin-Noël: *Vers l'inconscient du texte*, Presses Universitaires de France, collection 《Ecriture》, 1979, 203 p.